

熟達度測定テスト TOEFL Primary[®]を 継続的に受験する意義について

～定期考査・模試・英検と比較しながら考えてみませんか～

明星大学 教育学部教育学科 准教授

佐古 孝義

〈2022年度まで、京都教育大学附属高等学校 進路指導主任/英語科主任〉

1. はじめに P1
2. 定期考査・模試とは何か? P1
～一定の範囲の学習内容の理解度・到達度を確認するもの～
3. 英検[®]の特徴 P3
～TOEFL Primary[®]のスコアと英検の取得級との対応を示した図からわかること～
4. TOEFL Primary[®]を受ける意義 P4
～英語の熟達度そのものを測定～
5. 今後の方向性を考えてみる P7
～高校入試がTOEFL Primary[®]のような〈熟達度〉型の試験に移行～
6. おわりに P7

著者紹介

佐古 孝義

明星大学 教育学部教育学科 准教授

〈2022年度まで、京都教育大学附属高等学校 進路指導主任/英語科主任〉

1980年岡山県生まれ。京都大学大学院 人間・環境学研究科修士課程修了。

現在、同大学院人間・環境学研究科博士後期課程在籍。

主な著書に『コーパス・クラウン総合英語』（編集委員会代表、三省堂）。

TOEFL ibt[®]：112 (R30・L30・S24・W28)、英検1級。



Danke Sehr

1. はじめに

いきなりですが、皆さんに質問です。
「あなたはどのくらい英語ができますか？」

こんな漠然とした質問をされて、皆さんの多くは困惑したことだろうと思います。何ををもって「英語力」というのかという定義（内実）に踏み込めばいくらでも議論は複雑になるでしょうが、ここは差し当たり、何らかの「指標」で自分の英語力を示すという場面を考えてみてください。

私は、私立や国立の中学・高校で20年近く勤務し、国際教育や進路指導の担当を務めてきました。そうした経験を振り返ってみると、いわゆる「英語力」という問題に関わって、模試※1を受ける意味や、模試と定期考査の違い、英検®などの資格試験を受験するべきか否か、などについて生徒からよく質問や相談をされてきたことを思い出します。本稿では、こうした問いを導きの糸として、TOEFL Primary®を受験する意義についても考えてみたいと思います。

もう少しざっくりとした言い方をすればこうなります。

「模試を受けていたら、TOEFL Primary®受けなくてもいいですね？」

「英検®受けるからTOEFL Primary®受けなくてもいいですね？」

こう生徒に聞かれたときに、私ならどう答えるだろうか？それを考えてみたいということです。

※1 ここでいう模試（模擬試験）とは、「各予備校や塾、企業などが実施する、高校や大学の入学試験を想定した試験」のことを指すものとします。

2. 定期考査・模試とは何か？

定期考査では点数が取れるのに、模試ではちょっと・・・」

こんな生徒の声をよく耳にしてきました。定期考査では、特に中学校では学習指導要領外のこと（いわゆる教えていない／習っていないこと）を出すわけにはいかないし、問題は授業でいつも使っている教科書や問題集をベースに作られるものがほとんど（もちろん、それぞれの学校によって事情は異なりますので、例外はあると思いますが）。要するに「**範囲が決まっている**」がゆえに、がっちりきっちり勉強すれば、場合によってはそれこそ満点だ

って狙えてしまう。これが定期考査の基本的なフォーマットでしょう。これは一体どうしてなのでしょう？出題する先生側の立場からお話しさせてもらえば、**定期考査には〈到達度〉の確認という目的**があるからです。

一方で、模試を考えてみましょう。よく「模試ではその生徒の『実力』が出る」などと言われるかもしれませんが、その理由の一つには、模試では**定期考査よりも広い範囲（場合によっては「高校で習う全範囲」ということもありますよね）が問われる**ということが挙げられるでしょう。定期考査と違って「ヤマを張りにくい」わ

けですね。長文問題は言うに及ばず、どの英文も初見のものばかりです。出題形式についても、「〇〇もぎ」「そっくりもぎ」などのようにターゲット高校の入試問題を踏襲するもの、公立高校入試に似せた試験形式や、あるいは広く一般的に入試に対応できる能力を測定するために様々なバラエティに富んだ問題を出題するものなどがあります。このように、内容面でも形式面でも定期考査以上に対策を取るのが難しいため、模試は正に皆さんの「英語の実力」を試すものと考えられるわけです。

一般的に、**模試を受験する意義**というのは、**「受験に必要な力」の定着度を確認するところ**にあります。それは、「偏差値」であったり、「合格可能性」（いわゆる「判定」というものですね）といった指標で数値化され、可視化されます。皆さんにとっては、自分の英語力の指標としてとても分かりやすいものだと言えるかもしれません。（慌てて補足しておきますが、ゆめゆめ模試での「偏差値」や「判定」にのみ一喜一憂してはいけません。よくHR担任や進路指導の先生から耳にタコができるほど聞いていると思いますが、成績表に載っている設問別正答率などを頼りに、どの問題をなぜ間違えたのかという誤答分析を丁寧に行い、苦手分野の発見と克服に努めるべきであるということは、すでによくご理解いただいているところでしょう。）

さて、確かに模試は自分の英語の実力を示す非常に分かりやすい指標だということは認めましょう。とはいえ、それはあくまで**「入試（合格）」という特定の目的に照らした場合の実力であり、「実際に英語が使えるかどうか」を示したものではありませんよね。**ところが（当然ですが）**「実生活で使う英語」**は必ずしも中学校の授業で扱われる内容に限られませんから、**「模試の成績＝実践で使える英語力」**

とはならないことは容易にお分かりいただけると思います。

ここで皆さんの英語学習の目的が、高校入試に合格すること「のみ」であるならば、模試を受験するだけで十分であると言えるでしょう。しかし、極めて特殊な例外を除けば、高校に入っても英語の勉強は続きますし、高校を卒業して大学に進学したり、実社会に出てから全く英語と無縁で生きて行く人生を考えることは非常に難しいでしょう（そんなふうに分の人生の可能性を狭めてしまうのは得策ではないと思います）。入試を突破した後も続く英語の学習を考えるならば、**英語力の伸長を測るのに模試「だけ」でよいということにはならない**ことは明らかです。

「じゃあ、自分の英語力を測りたいと思ったらどうしたらいいの？」

この問いに対する答えとして多くの皆さんが思い浮かべる答えの一つは、英検®などの資格試験でないかと思います。

3. 英検®の特徴

ここで、皆さんにとって最も馴染み深い英語資格試験の一つである英検®について見てみましょう。英検®は、その正式名称「実用英語技能検定」が示す通り、日常英会話からビジネスまで幅広い場面や話題を扱った出題によって、実用に即して4技能（リーディング・リスニング・ライティング・スピーキング）を測る試験です。英検®の特徴として、学習進度やレベルに応じて7つの級が設定されていること、（CSEスコアも出ますが）やはり「合格か不合格か」の差が決定的な意味を持つことが挙げられます。つまり、例えば2級に合格すれば2級のお墨付き、ということです。でも、裏返して意地悪く言えば、合否ラインのギリギリでも構わない。でもそれって本当に2級が求める英語力※2を十分に身につけたと“自信を持って”言えるでしょうか？ **実際、TOEFL Primary®のスコアと英検®の取得級との対応**

を示した図※3をみると、同じ2級、あるいは準2級保持者でも、その実力の幅はかなり広いことがわかります。

また英検®は日本で最も有名な英語資格試験だけあって、英検に特化した塾やオンライン講座、豊富な過去問や予想問題集など、対策はかなりシステマティックになっており、対策の有無が合否を大きく左右するという側面があることは否定しがたい事実だといえます。上位級であれば、高校や大学の入試・就職・転職などで有利に働くこともあり、「目指す級に合格すること」が英語学習の（短期的）目標になることもあるでしょう。もちろんそれ自体は全く否定されるものではありませんが、英語学習の目的が「英検®〇級合格!」だけに留まってしまうなら、**合格したらほっと一安心して勉強を止めてしまうことになるかもしれず、それはちょっと寂しいような気がします。**

※2 英検®の公式ウェブサイトでは、2級に関して

- ・読む：まとまりのある説明文を理解したり、実用的な文章から必要な情報を得ることができる。
- ・聞く：日常生活での情報・説明を聞きとったり、まとまりのある内容を理解することができる。
- ・話す：日常生活での出来事について説明したり、用件を伝えたりすることができる。
- ・書く：日常生活での話題についてある程度まとまりのある文章を書くことができる。

というCan-doリストが示されています。

<https://www.eiken.or.jp/eiken/about/cando/list.html>

※3 あるイメージン実践校におけるTOEFL Primary®のスコアと英検®の取得級との対応図（ダンケゼア提供資料）

世界の学生向けに開発
熟達度測定

日本の学生向けに開発
到達度測定

TOEFL Primaryスコア		CEFR	英検 保持級								英検取得年			
スコア	人数分布		無	5級	4級	3級	準2級	2級	準1級	1級	1年以内	1年～2年	2年以上	取得年
合計	287		36	9	23	29	35	57	11	0	70	53	23	35
230	5	B1 2級						1	3		3	1		
229	16		2			1	1	6	3		1	7	3	2
228	18			1	1	1	1	12	3		4	2	8	
227	14							10			1	6	3	
226	13							3	2			3	2	
225	10						2	2			2	1	1	
224	10						2	4			2	2	2	
223	9						1	5			4	1	1	
222	6	A2 準2級	1				1	3			3	1		1
221	8					1	2	1			2	2		
220	6						2	2			1	3		
219	4						1	2			2	1		
218	60		11	4	11	13	16	5			20	16		10
217	9		1		1	2		1			4			1
216	19		3		4	3	3				8	3		2
215	8		3			1					1			3
214	8	A1 3級			1	1	2				3	1		
213	14		2	2	3	2	1				3	2	2	3
212	10		4	1		2					2	1		4
211	3		2			1					1			2
210	5		1			1					1			1
209	8		2	1	2						2		1	2
208	3													
207	1													
206	3	A1未満	1											1
205	2		1											1
204	0													
203	3		1											1
202	1		1											1
201	1													
200	0													

4. TOEFL Primary®を受ける意義

次に、TOEFL Primary®を見てみます。この試験はコミュニケーション英語中心に世界の小学生・中学生を対象にCEFR A1未満からB1前半までの範囲で「どれだけ英語が使えるか」を測るために、定期考査や模試のよう

に一定の範囲の学習内容の理解度・到達度を確認するものではなく、専門知識や背景知識を問わず英語の〈熟達度：どれだけ英語が使えるのか〉そのものを測定するものとして設計されています。端的に言えば、定期考査や

模試と比べて「実際に『今』どれくらい英語が使えるのか」のリアルを測っている試験であると言えるでしょう。

もう少し具体的に検討してみましょう。TOEFL Primary®の問題では、一例として、重要な単語を繰り返し述べた簡単な指示を理解することができるかどうかを確かめるために、ポスターやグラフ、伝言のメモなどの資料を見ながら、それに関する質問に対する答えを選ばせる問題であるとか、簡単なストーリーの要旨の理解度を試す問題が出題されます※4。

これが意味するところは明らかでしょう。**より実践に即した〈熟達度〉を測りたいというポリシーが体现されている**わけです。

TOEFL Primary®は、スコアとCEFRのランクで示され、英検®とは異なり、級別に可否を判定するものではありません。ですから、試験に合格するという目標達成のための”瞬間最大風速”を目指すものではなく、あくまで「今の素の英語力ってどれくらいだろう」と診断的に受けるものだということがわかるでしょう。（これは、人間ドックに例えると分かりやすいかもしれません。人間ドック前だけ食事の節制をして数値を良くしようとすることに何ら意味はないですね。）

瞬間最大風速を目指すものではないということは、逆にいえば**継続的に自分の英語力の変化を見てゆくことができる**ということでもあります。興味深い事例として、英検®2級や準2級保持者のTOEFL Primary®スコアの推移を見てみると、取得後の勉強を怠っていたと思しき生徒のスコアやCEFRのランクが下降しているのが見て取れます※5。ここから読み取るべき教訓は「英語（第二言語）は使い続けなければ劣ってゆく」（京都大学金丸准教授の言葉）という乾いた真実ですね。**自分の英語学習を継続的に点検し、修正を図るためにも、**

時期をおいて何度か受験してみるということがいかに大事であるかがわかるかと思います。

つまり、入試合格のため、資格試験突破のため、という目標を超えて、一生涯英語と何らかの形で付き合い、勉強を続けていこうとするのであれば、**ある瞬間の〈到達度〉を測る試験だけではなく、継続的变化を〈熟達度〉の観点から測定する試験も上手に活用していただければいい**ということです。皆さんが将来どんな目的で、どれくらい英語を使うことになるのかは、人それぞれ違って当然良いと思いますが、外国語を学ぶ意義を、先に述べたような実利的な文脈「だけ」に限定してしまっただけではもったいない気がします。

ところで、「複言語主義(plurilingualism)」という言葉をご存知でしょうか。「複言語」とは様々な言語を様々なレベルで（＝別にペラペラと話せる必要はない）目的に応じて使い、かつ言語の背景にある文化を理解したうえで、交流し共存している状態のことを指します。言語学習の意義は、この複言語能力を伸ばすことだとCEFRでは言われています※6。私は、皆さんが教室（学校教育）で外国語（多くは英語だと思いますが、理想的にはそれ以外の言語も含めて）を学ぶことには、「**言語や文化に対する寛容性(tolerance)や多様性を受容する姿勢(positive acceptance)を身につける**」という意義があると思っています。それがわかってもらえたら、きっと**一生をかけて勉強を続けてもらえる**のではないかなと、ちょっと楽観的に考えています。とは言っても、入試も資格も大事なことに変わりないんですけど…。

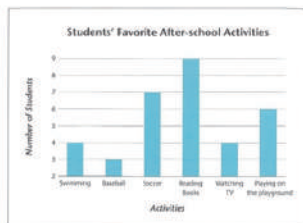
※4 TOEFL Primary® サンプル問題 (ダンケゼア提供資料)

104-106短い簡単な説明や会話、メッセージを理解している。

- ・ 日常会話で使われる一般的な表現を理解することができる。
- ・ 聞いたことのある単語を使用し、重要な単語を繰り返し述べた、簡単な指示を理解することができる。
- ・ 重要な情報を繰り返し述べたメッセージの目的を理解することができる。
- ・ 重要な情報を明確にかつ繰り返し述べた、簡単なストーリーの要旨を理解することができる。

Part 2-①(4問×2)

<ポスターやグラフ、伝言のメモなどの資料を見ながら、それに関する質問に対する答えを選ぶ問題>



What is the most popular activity?

- (A) Reading books
(B) Watching TV
(C) Playing on the playground

What is the least popular activity?

- (A) Swimming
(B) Baseball
(C) Soccer

How many students like swimming?

- (A) Seven
(B) Three
(C) Four

Which two activities do an equal number of students like?

- (A) Baseball and soccer
(B) Swimming and watching TV
(C) Playground and reading books

※5 TOEFL Primary® Totalスコア検証 水準別各層のスコア推移 (ダンケゼア提供資料)

CEFR	スコア Step1 Step2	中1~中3 主なスコア推移タイプ(実例)	中1 前期 4月~7月 後期 11月~1月 2回平均スコア 成績優秀者 ①	中2 前期 4月~7月 後期 11月~1月 2回平均スコア 成績優秀者 ①	中3 前期 4月~7月 後期 11月~1月 2回平均スコア 成績優秀者 ②③	【参考】 英検 合格水準 スコア
		中1 プレテスト→中2 ホストテスト→中3 ホストテスト				
B1前半	230					230
	229					229
	228	① 中1:B1前半→中2:B1前半→中3:B1前半	① 228	① 227	② 228 ③ 227	228
	227					227
A2後半	226					226
	225					225
	224	② 中1:A2後半→中2:A2後半→中3:B1前半	② 224	② 224	① 224	224
	223					223
A2前半	222					222
	221					221
	220	③ 中1:A2後半→中2:A2後半→中3:B1前半	③ 220	④ 221 ③ 219		220
	219					219
A2前半	218					218
	217					217
	216					216
	215					215
A1後半	214	④ 中1:A2前半→中2:A2後半→中3:A2後半	④ 214	⑥ 213	⑥ 213	214
	213					213
	212					212
	211					211
A1前半	210					210
	209	⑤ 中1:A1後半→中2:A2前半→中3:A2後半	⑤ 209	⑤ 209	⑦ 209	209
	208					208
	207					207
A1前半	206					206
	205	⑥ 中1:A1前半→中2:A2前半→中3:A2後半	⑥ 205	⑦ 205	⑤ 205	205
	204					204
	203					203
A1未満	202	⑦ 中1:A1未満→中2:A1前半→中3:A1前半	⑦ 202			202
	201					201
	200					200

※6 Council of Europe (2007). From linguistic diversity to plurilingual education:

Guide for the development of language education policies in Europe. Council of Europe.

<https://rm.coe.int/CoERMPublicCommonSearchServices/DisplayDCTMContent?documentId=09000016802fc1c4>

5. 今後の方向性を考えてみる

実は今、高校入試がTOEFL Primary[®]のような〈熟達度〉型の試験に移行してきています。それと同じく、中学における英語の授業も、スピーキングも含めた4技能をバランスよく伸ばすコミュニカティブな方向へ変わりつつあるのではないかと私は見えています。つい先日も、令和5年度の「全国学力・学習状況調査」が発表され、中学生のスピーキング能力を今後どう伸ばしてゆくべきなのかという課題に世間の関心が寄せられているところです。文部科学省は、話す力も含めた総合的な英語力を伸ばすための実践として、「授業において複数の領域を統合した言語活動を充実させることが求められる」ため、「これらの活動を通して、聞いたり読んだりしたことに対して自分の考えをもつことができるように指導することが大切である」と述べています^{※7}。この潮流が今後の主流となってゆくだろうということを示唆する事例を紹介して、この小論を締めくくりたいと思います。

私が今勤務する大学で「英語科教育法1」という授業を受講している学生が答えてくれたアンケートの回答を一部抜粋してみます。将来どんな英語教師になりたいかという問いかけに「全員が楽しく元気に参加できる英語の授業をしたい」「自分がどう思ったか、考え、感じたのかを表現できる英語力をつけさせたい」「異文化交流といったコミュニケーションを通じた価値観の共有の大切さを授業で伝えてゆきたい」などと答えています。もちろん全てを実現できる実力をつけてもらうのはまだまだ先のことになると思いますが、志としてこんな思いを持った英語の先生が全国各地の現場に輩出されていくでしょう。そんな理想的な未来を夢想してしまいます（その実現のために私も今の大学でできることを一生懸命やろうとしています）。こうした未来の世代の英語教師がいる限り、英語教育はきっと良い方向に変わってくるはずですね。

※7 国立教育政策研究所(2023).「令和5年度全国学力・学習状況調査 児童生徒一人一人の学力・学習状況に応じた学習指導の改善・充実に向けて」(報告書 中学校 英語【速報版】)文部科学省, p. 93.

6. おわりに

色々ここまで述べてきましたが、皆さんには、単に入試を突破するためとか就職などに有利なスキルとしてだけの英語学習ではなく、「複言語能力」として、日本語も英語も（その他の言語も）使って自己と／他者と対話してゆけるために、生涯学習として英語を学ぶべきだし、そのための素地を教室の中で身につけていってほしいと考えています。先述のとお

り、その手助けをしてくれる先生もどんどん増えてゆくことでしょう。どうか焦らず自分なりのペースで、末長く英語と付き合っていってほしいと私は思っています。そんな継続的学習のお供に、TOEFL Primary[®]のような〈熟達度〉を測る試験をうまく活用していただくと、なお良いのではないのでしょうか。